

令和6年度第3回岡山市総合教育会議

日時：令和7年2月4日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

午後3時30分 開会

○司会 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和6年度第3回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

○市長 特段問題ないですよ。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 はい、ではよろしく申し上げます。

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。

市長、よろしく願いいたします。

○市長 それでは、次第に沿って議事を進めます。

本日の議題は、第2期教育大綱における指標の達成状況と今後の取組について、SNSの普及に伴う弊害についての2つであります。それぞれ教育委員会から報告をしていただき、それらを踏まえて今後の課題や取組の方向性などについて議論していただきたいと思っております。

前回に続き、岡山市中学校長会の佐藤会長、それから岡山市小学校長会の半澤会長にもご出席をいただいております。2名の方々にも議論に入っていただきたいと思っております。

まず、協議事項(1)第2期教育大綱における指標の達成状況と今後の取組。

教育長から説明をお願いいたします。

○教育長 失礼します。

今回の協議議題に、先ほどありました第2期教育大綱における指標の達成状況と今後の取組について、及びSNSの普及に伴う弊害についてを挙げていただき、ありがとうございます。

では、まず資料1-1から順次説明をさせていただきます。

資料1-1は、第2期教育大綱における指標の達成状況についてまとめております。参考資料のデータも併せてご覧ください。

なお、分析については後ほど資料の1-2で触れますので、ここでは資料の1-1、達成状況のみお伝えします。

まずは、第2期教育大綱の基礎となる2つの目標についてです。

1つ目、「全国平均レベル以上の学力」について、全国学力・学習状況調査の偏差値が令和元年以降、5年連続で50以上を維持することができており、達成できています。

2つ目、「新規不登校児童生徒の減少」については、出現率の現状値が1.35%となり、目標値である0.74%以下を達成することはできませんでした。

続いて、育む5つの力を計る4つの指標についてです。

1つ目と2つ目が主に学力向上に関する指標、3つ目と4つ目が主に集団づくりに関する指標になっています。

では、1つ目、「自分の考えを整理して伝えることができる児童生徒の増加」については、全国学力・学習状況調査の記述式問題の正答率が対全国比1以上を指標としておりますが、おおむね達成しています。

2つ目、「情報を収集し、考えをまとめて発表をしている児童生徒の増加」については、全国平均と比較して小・中学校ともに2から3ポイント低い状況であり、目標を達成することができていません。

3つ目、「協力しようとする児童生徒の増加」については、中学校で4.7%上昇しているものの、小学校では低下しており、5ポイント上昇させるという目標を達成できていません。

4つ目、「人を大切にできる児童生徒の増加」についても、残念ながら小・中学校ともに数値が低下しており、目標を達成することができておりません。

次に、資料1-2をご覧ください。

資料1-2は、指標の達成に向けた取組の評価と分析についてまとめております。

まず、学力向上に関する指標について。

教育委員会としては、授業づくりの基本となるリーフレットの作成や動画の配信等により、授業改善の視点や好事例を周知し、その視点で授業研究会や校内研修等において指導、助言を行ってきました。さらに、第1期教育大綱から、学期に1回程度の学校訪問を

継続し、校長先生をはじめとする管理職の先生方との面談を行っています。これらの取組により、参考資料の①をご覧くださいと、全国平均レベル以上の学力が5年連続で維持できていると考えています。

また、参考資料の②記述式問題の正答率をご覧ください。

全国学力・学習状況調査の記述式問題の正答率については、中学校で対全国比1を下回っていますが、令和5年度は1.00、令和6年度は0.99であり、おおむね達成できてきていると考えております。

次に、ICTの活用支援や先進事例を共有したり、探究的な学習の充実を図る研修会を実施したりしてまいりました。その結果、参考資料③のとおり、「探究的な学習をしていると感じる児童生徒の割合」は、全国平均には達していないものの、数値は小・中学校ともに大幅に上昇することができており、取組の方向性は間違っていなかったと感じております。今年度から、岡山市立小・中義務教育学校に導入した授業支援ソフトにより、ICTの活用率もかなり向上してきておりますので、引き続きこれらの取組を継続することで、未達成の指標についても数値の改善が見込まれると考えています。

続いて、学級集団づくりに関する指標についてです。

教育委員会としては、学級集団づくりの参考となるリーフレットの作成を行い、学校への普及啓発に努めてきました。また、学習生活状況調査を実施することにより、いじめのサインや対人ストレスなどの児童・生徒のSOSを見逃さない取組を実施しています。さらに、思いやりの心、規範意識等の育成を目指した道徳の授業公開等を実施してまいりました。しかしながら、参考資料⑤「協力しようとする児童生徒」の増加、及び⑥「人を大切にできる児童生徒」の増加という指標については、先ほどお伝えしたとおり、未達成です。

そこで、学級集団づくりに関する他の質問項目を見てみました。

参考資料⑦の2つグラフをご覧ください。

「人の役に立つ人間になりたいと思う」、「いじめは、どんな理由があってもいけない」と回答した児童・生徒の割合は、ともに全国同様95%程度であり、岡山市の子どもは人と関わることに肯定的であると考えています。では、なぜ指標が未達成なのか考えたときに、協力したほうがよい、人を助けたほうがよいという気持ちは十分にもっているが、実際に協力する、困っている人を助けるという行動に移すところに課題があるのではないかという結論に至りました。学級集団づくりに向けた教育委員会の取組は、子どもの気持

ちを育むことについては効果があったと考えているので、今後も継続していきます。しかし、子どもの実践につながっていないので、第2期教育大綱の最終年度である令和7年度には、子どもの実践力、つまり子どものやってみようにつながる新たな取組が必要であると考えています。

資料1-3をご覧ください。

資料1-3は、令和7年度に何をしていくのかについてまとめています。

子どもの実践力を高めるために、子どもがやってみようと一歩踏み出そうとする意欲を高める取組が必要であるとと考えています。子どものやってみようという意欲を高める取組として、教育委員会では令和5年度から、教科学習による学びの過程を振り返る時間をきちんと確保するように取り組んでまいりました。振り返りとは、子どもが学習を通じてできるようになったことを実感したり、次の学習に向けて意欲を高めたりすることを目的に行うもので、学力向上の取組に有効であったと考えております。今後は、教科学習に効果があった振り返りを、他者と協働して取り組むことがより重要になる特別活動や、総合的な活動の時間にも広げていくことで、子どもの意欲が高まり、集団の中で自分の役割を果たそうとするのではないかと考えております。子どもがやってみようと思える環境づくりに向けては、若手教員が増加している学校現場に対し、教員向け資料を配布するなどし、研修の実施方法の具体例を周知していきます。加えて、問題行動等が多発している学校に対して、質問紙調査の分析を教育委員会が一緒に行うなどの支援を行うことにより、教員が自信を持って児童・生徒に向き合える力が身に付き、子どもが安心して挑戦できる学級集団づくりを進めてまいります。また、学校と一緒に分析を行った内容は、好事例として他の学校に共有していきたいと考えております。

説明は以上です。ご協議のほどよろしくお願い申し上げます。

○市長 ありがとうございます。

それでは、委員の皆さんからお話を聞きたいと思いますが、その前に、両校長会の会長さん方にお伺いをしたいのですけれども、資料の1-2を見ていくと、「学力向上に関する指標について」という左側、教育委員会の取組がありますよね。こういう取組をしている、これは一つ一つ前に向いて動こうとしている。その結果が、評価・分析のところの問題になってくる、その前に数値としては1-1に書いてある。学力に関しては効果があり、そしてこの取組を継続しましょうと言っているのですが、逆に「学級集団づくりに関する指標について」はうまくいっていないのか、改善が必要だと言っている。特に、この

後段の学級集団づくりに関して、肌感覚として何が問題になっているのかというのをコメントしていただければ、委員の皆さん方の議論の手助けになるのではないかなというように思いますので、佐藤さん、半澤さん、どちらからでも結構ですが、感じられていることがあればお願いをしたいと思います。

○佐藤中学校長会長 失礼します。

私が感じているのは、中学校現場としては少しずつ集団づくりが取り戻せているのではないかなと思っています。やはり、一番はコロナの影響というのが大きかったのではないかなと思っています。ソーシャルディスタンスですよと、距離を保つのですよということを一生涯懸命やってきて、子どもたちはそれに応えてくれて、例で言うと、給食も黙って前を向いて食べてくれていたのですが、コロナが5類になって、だんだん友達と距離を近づけてもいいのだと、助けてもいいのだというようなことになっているので、効果としてはこれから少しずつ出てくるのではないかなと私は思っております。

○市長 じゃあ、半澤さん、お願いいたします。

○半澤小学校長会長 失礼いたします。

私も、基本的には佐藤校長先生と同じような考えをもっております。コロナの影響が大きかったなというふうに思います。2類から5類になったのが昨年、令和5年度5月ということで、そこまではかなり岡山市の小学校は慎重に対応をしていたと思います。それで、特に大きい学校、鹿田もそうですけれども、大規模な学校ほど慎重な対応をやってきたと思います。その部分に少しスピード感がなかったと言われたら、そのとおりなのかなと思います。

鹿田小学校の例を挙げて大変申し訳ないのですけれども、例えば月に1回児童朝会というのをやりますけれども、私たちが子どもの頃はほぼ毎週やっていたけれども、その児童朝会にしても、そのときの感染症の状況によって全校が集まるのではなくて、放送にすぐ切り替えたりとか、特にこの時期は、今コロナとかインフルとかがはやっていますので、全校は集まれないよねという感じで、コロナによって免疫力が下がった、その影響がまだあると思っていますし、インフルが急にはやったりということもしていますので、そのあたりの動きの鈍さということがまだあるのかなと思います。指定都市の校長会なんかでも、市長さんにも出ていただいたのですけれども、その中で話を聞いていますと、ほかのところは結構思い切って、えっ、そんな、もうやるのというような状況で動いているなと思った次第です。なので、岡山市として慎重になっていたかなと思いますが、数値的に

は今後上がってくるのかなと期待しています。

○市長 ありがとうございます。お二人の校長さんからお話をいただきましたけれども、この第2期の大綱に関して、取組の一応評価が出ていますので、これらを踏まえて、それぞれ教育委員の皆さん方にご意見などをお願いできればと思います。どなたからでも結構ですが。

はい、お願いいたします。

○上西教育委員 上西でございます。

この第2期教育大綱における指標の達成状況ということで、まず説明がありましたように、学力の点については順調に来ていると。なので、このまま進めていただきたいかなと思っています。

少し話題に出ている学級集団づくりですね。これも、育む5つの力の中で、恐らく社会性とか、そういったところの問題なのだろうと思います。資料1-3を見ると、振り返りということ徹底するという形で対処していくということで、それはそれでぜひ進めていただきたいと思いますが、私がちょっと思ったのは、やはり経験かなと。経験というのは、ふと助けるとか、ふと助けられるとか、ちょっと手を差し伸べるとか、そういう日々の細かい積み重ねが社会性を育んでいくのではないかなと思って、なかなか授業の中でそれって難しいのではないかなと思って、行事であるとか委員会活動とか、そういうところをうまく活用していくべきなのかなというふうに感じました。

それで、考えてみたのは、なかなか同じクラスで、対等と言うのはあれですけど、助け合うのは難しい人もいるかもしれない。となると、学年をまたいで、上級生が下級生と何か接するそういう機会を少し増やしていったら、そうすると上の人は、弱気な子でも、年下の子であれば助けやすいという場面もあるかもしれませんし、そういった何か機会、経験を積む機会を少し工夫をして増やしていただければいいのかなと思いました。

以上でございます。

○市長 はい、じゃあ、お願いいたします。

○門原教育委員 門原でございます。

まず、上西委員がおっしゃったように、同じようなことになるのですが、学力向上につきましては、引き続き継続していくことが大事かなと思います。

それから、学級集団づくりですけれども、評価・分析のところに書いてあるように、実践する力、だから80%から90%の子どもたちは何か助けようとか、もっと役に立とうと思

っているけれども、それを実践する場が、これまでのコロナとか、いろいろなことで制約を受けていたということを仮説と考えると、これからはそういう場づくりを、市のほうで言われていますけど、特別活動で毎日の日直とか係活動とか、そういうところで困っていたら助け合うとか、何でこういうことができなかつたのかという合意形成を図るような話し合いをするとか、そういうふうにして、新たなことをするのではなくて、これまでであった学校の中のカリキュラムの中でそういうことをもう一度振り返って、ただ行事があるからするということではなくて、なぜそれをするのか、じゃあ、自分がそのために何ができるか、どういうことができるかということを考えて、実際に振り返りをして、PDCAを回していくことが大事かなと思います。

先ほど話に出したのですが、エジプトは国を挙げて、日本の特活を「TOKKATSU」といって、国を挙げて視察に来られて、今取り上げて、子どもたちが毎日丁寧に掃除をしたり、係活動をしたり、学級活動をして成長しているところなので、日本の教育というのは間違っていない部分もありますから、そこはしっかり足元を見直していけばよいと思います。

それからもう一つ、上西委員がおっしゃったように、異学年交流は非常に大事なことで、同学年だけではなくて異学年で社会性を培うとか、社会性の中にもいろいろあると思うのですが、それが、私も研究した中では社会性が培われているというのがありましたので、すごく大事、その場をつくるのが大事ではないかなと思います。場の設定は教員がしますが、その動きについてはある程度児童・生徒の主体性に任せて、させて、できなかったらなぜというふうに、次にやっていく。いつも成功するのではなくて、なぜできなかったのかということをお話しとか、いろいろな実践でトライしていくとか、それがすごく大事かなと思いました。ありがとうございました。

○市長 ありがとうございました。

では、片山さん。

○片山教育委員 片山でございます。失礼いたします。

私も学力向上に関しては、先生方が丁寧に取り組んでくださって、子どもたちが自信を持って学習にも取り組む、自分もできるだろう、できるかもしれないという前向きな気持ちで取り組む一歩になるかなと思って、ありがたいなと保護者の一人としても思う次第です。

続いて学級集団づくりということに関しては、先ほどコロナのお話があって、今日も私

は、マスクをしているのですけれども、マスクの影響というのはすごく大きかったらう  
なと思います。表情が見えないというのが、お互いの心を読む上ですごく情報不足になる  
部分もあり、お友達がどう思っているかなという、目だけで見る感じになってしまうの  
で、やっと、うちの子もそうですけれども、出かけるときにマスク、マスクって言わなく  
なりました。だけど、その一方でまだ、私は、事情があつてマスクをしているけれども、  
マスクを外せない、むしろマスクを外すと恥ずかしいというような子もいる現状も、大学  
生も結構そんなのもあったりするのですけれども、何かそういうところでマスクがない、  
コロナの感染を気にした生活というものから脱却していく、そのプロセスの途上なのかな  
というのも一方で思うところです。

それから、先ほどの今度実践する力、分かってはいるのだけどできないということに関  
しては、できるだろうとか、やったらやれそうだというふうに、自分の中でもやれそうな  
自信というものをこれからしっかりとつけていって、そのためには成功する体験という  
のも必要でしょうし、場合によってはスキルを教えるということも必要だと思うのですけ  
れども、その際には自己評価だけじゃなくて、他者からの評価というか、ありがとうと  
か、よくできたねとか、そういう、多分岡山市の子どもたちは、先生から自分の良さをよ  
く理解してもらっているというような回答も高かったと思うのですけれども、そういった  
ところで子どもたちがやってみようのところに至る自信をしっかりとつける、やっごら  
ん、やれるよ、きっとという、本人では踏み出せない一歩を少し後押ししたり、友達から  
の称賛だったり、何かそういう他者評価の部分をみんなでいいところを見つけるとか、い  
いところを褒め合うというのも変なのですけれども、認めていくとか、そういう他者との  
関わりの中でのいい体験、関わってよかった、そういうのを増やしていただく機会を増や  
していただけると、もっともっと違っていくのかなというふうに思います。

長くなりました、以上です。

○市長 じゃあ、中島さん、お願いいたします。

○中島教育委員 失礼いたします。中島です。

学力向上は、他の委員と同じ意見ですので、また引き続き関係各所の皆さんのご努力の  
下に、向上に努めていただければと思います。

やはり学級集団づくりなのですけれども、この参考資料⑤と⑥というのは、私が個人的  
に思うのが、まず意識の問題であると思いました。協力しようとする、人を大切にできる  
ということは必要だと思っている。それで、じゃあ、実践はということで、下の⑦ですけ

れども、いじめというのはまたほかの要因があるので、別に置いて、どういったことが役に立つのかというのが、すごく大まか過ぎるというか、人の役に立つことをしましよ  
うねと言っても、何をすればいいのかということもあるのかなと感じました、この資料を  
見て。例えば、重たい荷物を持っている子どもが部屋に入ろうとしたときに、ドアを開け  
てあげる。それでもいいのかなと思っていたり、これは私が目にした大人の話なのですが、  
高校生が百貨店のガラスのドアを開けるときに、前から人が来るときに、店内からお  
年寄りの人が来られていて、その女の子は店外から入ろうとしていたときに、ちょっと小  
走りにしてドアを開けてあげました。それで、おばあちゃんに「お先にどうぞ」と言って  
通らせてあげて、自分が入りました。これ、すごい役に立つことなのだけでも、こうい  
ったこと、本当にささやかな一つの行動を、これをしてあげようと、子どもたちが常にこ  
ういうことだなんて思っていれば、それが習慣づくだろうし、それを教えてあげれば、そう  
いうことをしようね、みんなお互いにと思えば分かるだろうし。それを気づかないとい  
うか、ドアを開けることが人に役立つことなのだとまだ理解できていない子もいるか  
もしれない。だから、どんなささやかなことでもいいから、何が人の役に立つからと、例  
えば記述して考えさせてみたり。じゃあ、今日あなたはどんな人に役立つことをしましたか。  
じゃあ、ほかから何がうれしかったですかとかというのを1つずつカウントさせるとい  
うか、意識させるということも、そしたら自覚というか、こういったことが自分がうれ  
しかったから、次してあげようとか、そういったことにつながるのかなと思っていて、  
意識がみんなあるから、どう行動するには何がそこに当てはまるかということ  
を導くこともできるのかなと考えました。

○市長 ありがとうございます。

4人の意見を聞かせていただいて、経験を増やしていく、異なる学年でやると、少し同  
学年、ないしは同じクラスでやるのとは違ってくるというのは、分かるような気がしま  
すよね。それから、先生たちが一定の行為があると褒めていくという、そのこと  
だけで子どもたちの感じる場所もあるだろうし、役に立つという定義というか、  
それを具体的に示してやることによって、少なくともこの回答の意味合いは  
変わってくるかもしれないということはそのとおりだろうと思うのですけれど、  
これらについて、何か教育委員会のほうで、教育長を含めて、何か  
ございましたら言っていただけますか。

○教育長 ありがとうございます。皆さんの意見を聞いて、私が芳泉小学校の校長の  
ときのことを思い出して、市長もご存じのとおり、若手教員がすごく今多  
いです。若手だけの

研修もしていました。そのときに私が言っていたことを、委員さんも言われたのですが、学級指導とか学級の子どもたちに指導をするときに、意外と若い先生たちが、例えば消しゴムを拾ってあげてありがとうと言うときに、黙って見ているのですね。いい行動をしとるのは当たり前、だから褒めない。それで、何かしゃべると、席を立つと注意する。子どもから見ると、先生には注意ばかりされるということが起きがちなのですよ。だから、委員さんも言われましたけど、いい行動が子どもに定着するためには、それはいい行動だよと褒めてあげないと、定着しないと思うのです。それが、今若い先生たちが増えたことで、全国等のデータはないのですが、ひょっとしたらそのあたりの細かな気遣いとか、テクニックなのかもしれないですけど、身に付けてもらう必要があるかなど。だから、先生の意識を変えてもらう。それで、学校現場の方に聞きたいのですが、今言っていたことは、我々が教員のとときに、帰りの会で、小学校は特によいことみつけでやりましたよね。それがいいことなのだとということをみんなに知らせるというか、壁に書くのもありましたが、人権週間なんかで。ああいった細かな取組が今できてないかなという危惧もあるのですが、そんなことを思いました。

○半澤小学校長会長 失礼します。

今、教育長が言われたような、良いことみつけとかいいところ探しというのは、うちの学校はずっと年間を通してやるようにしています。人権週間のときだけではなくて、特に学年開き、1学期ですね。1学期の早い段階で新しいメンバーになったときに、良いところを見ていこうというようなことをやるようにしていますし、多分今も帰りの会とか、そういうところで担任は子どもたちに、そういうふうなことを称揚するような時間を取っていると思います。

○市長 佐藤さん、ありますか。

○佐藤中学校長会長 中学校のほうは、残念ながら帰りの会でいいところみつけができていくかというところが、できていないところが多いのではないかと思います。私が勤務した学校でも、やっていた学校、やっていたクラス、やっていた学年ということで、できていないのではないかなど。そういうことをしっかり認めてあげる場面をつくると、岡山の、京山中の子をはじめ、岡山の子どもたちが伸びていくのではないかなど思いました。

○市長 教育委員会の方で何か発言ありますか。

○島田教育次長 教育次長の島田でございます。

実は、その問いは我々事務局内でもずっと協議をしてきております。教育長が申しまし

たように、褒めることはとても大切、一方で子どもたちの自己肯定感というのは、岡山市の子どもたちは非常に高い。それなのに、協力するとか困ったというところが、数値的には8割を超えていて高いのだけれども、一体なぜなのだろうと。先日も、岡山市立の小学校のほうへ給食を試食する会に行ったのですけれども、子どもたちは協力して我々を出迎えてくれましたし、それから会話に詰まって困っていると、気を利かせた子が話題を振ってくれたりとか、とても心優しい子どもたちが身の回りにたくさんいるのにもかかわらず、なぜなのだろうというのが正直なところ、我々としても悩ましいところであります。ただ、今ご意見を聞く中で、思いはあったけれども、自分自身の行動に対して一歩踏み出せない、控え目な子どもさんがいるのかなど。自分を出すためには、周りがしっかり褒めていくこと、いいことだという価値観をしっかり出していくことと、併せていい集団づくりをしていくことで相乗効果というところで、しっかり特別活動とか総合的な学習等で子どもたちに振り返りをさせる中で、実践力も高めていきたいと考えたところがございます。なかなかこれではないかというのは難しいなというのが正直なところでございます。

○市長 今、委員の皆さん方、また校長さん、教育委員会から議論が出ましたけれども、さらにお話のある方はいらっしゃいますでしょうか。

先ほど、教育長だったか島田さんだったかですけども、我々の学校の先生の特徴というとなにかということ、若い先生の比率が非常に多い。

○教育長 多いです。

○市長 そこに一つの問題というか、プラスにも転化するわけなのだけれど、それがあつたのではないのですかね。だから、別に言葉尻を取るつもりはないのですが、だから島田次長がおっしゃっている、我々がよく議論をしている、それはそのとおりであると思うのだけれど、それが若い先生に伝わっているか。伝わっているというのは、頭の中では多分伝わっている。だけれど、自然にそういう頭の理解を超えたものとして、若い先生方に身につけているか。そこはどうなのですかね。教育委員会でも校長さんでもいいのですけれども。佐藤さんのほうから、中学はうまくいっていない面もあるという話もありましたけれど、私は一人一人の教員とお話をしていると、どの人も真面目に一生懸命やろうとしている。だけれど、本当に身に付いているのかどうかということころは、そこはよく私も分からないのですけれども、どうでしょうか。佐藤さん、半澤さん、校長の立場からでも言っていただけますか。

では、半澤さん。

○半澤小学校長会長 今の若い先生たちに、私たちが若いときに教わってきたことが十分伝わっているかという、そこは難しいところもあると思います。例えば、私たちが若いときに、学年主任の先生からは、半澤さん、教室を出るときには必ず掃除をして、机と椅子をきちんとそろえて教室を出なさいよということ言われていました。それで、それは私たちが若い先生には伝えてはいますが、では、ふだんの生活の中で掃除をしているか。私生活の中ですよ。私生活の中で掃除をしているかという、例えば今お掃除ロボットがあります。お部屋の中を、ぼちっとボタンを押したら掃除ロボットが勝手に掃除してくれるような、そういう世の中にもなっています。なので、私たちの感覚からすると、隅々にごみがたまったり、それからそういったところをきれいにすることはすごく美しく見える。それで、全体として細かなところに気配りができるとは思っていますけれども、そういうふだんの感覚的なものは鈍くなっているのかなということはあると思います。ただ、そここのところは、今も学年主任が気がついて、必ず指導はしていますし、若手が集まったところ、若手の研修はうちもやっていますけれども、そういった中で話はするようにしています。ただ、こればかり言い過ぎると、またお小言の時間みたいなことにもなってしまいますので、それはさすがにできませんけれども、そういったことにはベテランは気になっているところはたくさんあって、そういう話をしていると思っています。

○佐藤中学校長会長 中学校は、学年団というチームで動くので、若い人を含めて一生懸命育ててくださっているなというのを感じています。それで、話が飛ぶのですが、教科指導については、教育研究研修センターからOJTというのをしてくださっていて、これはポイントとしていろいろなことを教えてくださって伸びているのですが、そのOJTの中になかなか学級集団づくりというメニューがないので、どうしても学級集団づくりについて学年団とか、チームカラーが色濃く出るところがあるのかなと感じました。

○市長 ありがとうございます。

○門原教育委員 私は教員養成をしているので、今学生がどんな気持ちでいるかという、岡山市受かりました、すごく意気揚々としていた時期があったのですが、今は不安でいっぱいです。4月から学級がうまくいけるか、先生たちとやっていけるか、教科ではちゃんと教えられるか。今、本当に不安でいっぱいなのです。多分これからお世話になっていくのだと思うのですが、私は若手教員の人たちの良さを、褒めるというよりも認める場をたくさんつくっていただきたいと思うのです。この学生さんたちも、コロナのときに葛藤をしていなくて、関係がうまくできない人たちが、これから子どもたちに関係づく

りを教えていけないといけないのですけれども、自分も認められて、ありがとうねとか、今日助かったよとか、そういうことを言ってもらうことが、今度は自分が子どもたちにそれを伝えることができると思うので、不安の軽減という意味でも、そういうことをしていただくと、教師集団の中も何か温かな環境になっていると思うのですけれども、緊張感でいっぱいの子は、ささいなことでもよいので、困っているよね、でもそれができたよねと、すごいよねとか。でも、スキルとか、伝えなきゃいけないことは、それはそれで別としても、そういうサポートも大事にさせていただくと、伸び代はある人たちなので、これから岡山市に貢献しようと思っている優秀で頑張り屋さんがたくさんいらっしゃると思うのです。だから、そこをどう伸ばすかというときのちょっとした声かけとか、そういうことが非常に大事ではないかなと思いました。

○市長 ありがとうございます。

ほかにありますか。

○中島教育委員 今、皆さんのお話を聞いていて、私はさっき、子どもたちは何が役に立つかが分からないから、それを教えてあげればいいのかと思ったのですが、そういえば若い先生自体がご指導の仕方とか何がどうなるかというのも世代が全く違うので、20代後半とか、ここにいらっしゃる方も若干年齢が高い方ばかりであるから、その先生方が実体験とか理解、納得、心の中から把握していないと、子どもたちには伝わらないのだろうなというのを皆さんのお話を聞いていて思いました。それで、企業としても全くそうで、組織づくりを今どの企業も言っていて、なぜならば、私ももう60近いですけど、後継者とか、次は30代とか、子どもなのですね。世代が違うから、考え方も違って、何が悪い、何が悪いというのも価値観が変わってきているから、その人たちがまず理解しないといけないのだなというのを考えたので、子どももなんですけど、市長のおっしゃるとおり、若手教員さんへのアプローチもあってしかるべきかなというのを今すごく感じました。ありがとうございます。

○市長 ありがとうございます。

今日は、このメンバーというよりは、前のメンバーのときは、学力をどうして向上させるか。岡山市だけが偏差値48の時代があったのですね。それは、岡山市の子どもたちがそんな学力であるはずがない。70万の都市であって、子どもたちの数も各学年5,000人を超える、そういった子たちがトータルで48というのはあり得ない。それから、無回答率も倍以上、それもあり得ない。それで、先生を見てみると、先生自身が決して悪いわけじゃな

い、今、門原さんがおっしゃったように、真面目で積極的な先生たちが多い。では、一体何なのだというところで、教育委員会と校長、校長と教員の接触を徹底的に大きくした。という結果が、今の数字になっている。これはすごい、私は意味があったことだろうと思うのですが、不登校であるとか、集団づくりの問題がある。そこも、ある面同じなのではないかと。ということで、これからは1つターゲットにそれをして、みんなでやっていく。だから、教育委員会もそうですし、校長会も議論をし、それをブレイクダウンして各学校で議論する。そういうものができてくれば、若手の先生方も納得する面もあって、門原さんがおっしゃるように、不安なものが大分解消されていく。そういう中で、校長さん方が褒めてあげれば喜ぶますし、というようなこと、いい循環をしていくというのを当面のターゲットにやっていくということも考えていただいて、教育長、そして教育委員会のメンバーでやっていただければと思います。この点はよろしいですね。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 では、次に結構大きな問題になってきます、SNSの話がありますので、そこに話題を移らせていただきたいと思います。

教育長のほうから、SNSの普及に伴う弊害について話をさせていただきます。

○教育長 資料2をご覧ください。

資料2は、SNSが普及したことによる弊害について、教育委員会としてまとめたものです。

SNSが普及し、生活が便利になってきた反面、匿名による誹謗中傷や虚偽情報の投稿など、深刻な弊害が生じております。子どもたちが被害に遭うばかりでなく、意図せず加害者になってしまう事案もあります。教育委員会としては、子どもたちをSNSの被害者にも加害者にもさせないために、子どもたちに指導を行うだけでなく、保護者や地域社会を巻き込んだ取組が必要であると考えております。

具体的に議論いただくために、これから配付します事例をご覧ください。

事例1は、アカウントのなりすましによるトラブル、事例2は、軽はずみな投稿が連鎖し、最終的には警察事案にまで発展したという内容になります。いずれもフィクションではありますが、同様の事案が岡山市を含め、全国的に起きています。学校でも深刻な事態が実際に発生していて、既に様々な取組をしている学校もあると聞いております。教育委員会では、質問紙調査や教育相談による実態把握や生徒指導など、これまで行ってきた取組の充実に加え、例えば啓発リーフレットを発出し、校長会や学校運営協議会、PTA総

会など、様々な場面での話合いに活用していただくなど、一人一人が自分事として捉え、よりよい社会になるような取組をしていきたいと考えております。

説明は以上です。ご協議のほどよろしく願いいたします。

○市長 いつも最初に佐藤さんの顔を見てしまう。京山中学の実態でもいいですし、ほかの中学の実態も教えていただければと思います。

○佐藤中学校長会長 中学生は、いろいろなSNSを使うことに詳しいです。多分、教員よりも詳しく使いこなすのではないかなと思っています。それで、いろいろなトラブルが起こっています。私が最初、自分がLINEという言葉を知って、次にグループLINEを知らないといけない。そして、インスタグラムのストーリーズを知らないといけない。全部中学生から起こっていることで、知らないといけなくなったなということです。

それで、本校の取組としてやっているのが、情報モラル週間という取組をして、これは学期に1週間、朝読書の時間に共有してもいい情報で、今ここで事例等を書いて出ささせているような事例について、こんなことが起こっていますと、どうすればよかったですかというようなのを1日1枚ずつ、それで1週間それを読んで考えるということを年3回やって、とにかく回数を何回も積んで、生徒たちに分からせていきたいという取組をしています。

○市長 それでは、半澤さん、お願いいたします。

○半澤小学校長会長 小学校ですので、中学校ほどではないというのが正直なところですが、どんどんと低年齢化はしてきているなと感じます。それこそ携帯が出始めた頃、今から10年近く前でしょうか、その頃から、例えば携帯のメーカーの啓発指導員さんを学校のPTAが呼んで、いろいろな研修をしてきました。それで、今道徳の教科書には、4年生、5年生、6年生ぐらいだと、携帯のLINEなんかのやり取りのトラブルの教材が必ず入っています。そういったこと、それを参観日に充てて保護者の人にも一緒に考えてもらうというようなことは、どこの小学校でもやっていると思います。

○市長 ありがとうございます。

このSNSの問題というのは、国単位でも大きな問題になっています。我が国はまだどうするかというところをドラスチックには決められていない状況ではありますが、我々としてどうすべきなのか、委員の皆さん方に少しご意見をいただければと思います。

では、上西さん、お願いします。

○上西教育委員 これは本当に深刻で、私は仕事柄もこういうトラブルの相談とかも結構

来ますし、感想めいた話になりますが、我々は話し言葉と書き言葉って、実は同じ日本語でも違って、SNS言葉みたいな言葉がやっぱりあるのだろうなと思っていて、そのとき少し脳が切り替わっているのではないかと思うぐらい、ふだんのその人の人柄とSNSで出てくる人格というのは、ずれる方が結構いるのですね。大人でしっかりした地位のある方でも、私生活のトラブルの中で出てくる文言を見ると、とんでもない文章を書いているというケースがあります。そのことをどう子どもに伝えるかって難しいですが、まず学校の先生がそのことを認識していただくと。我々は人格が1つじゃないから、いろいろな側面があるけど、SNSを使っているときの脳の働きというか、その人の人格って、ご自身では見えていない部分があるのだろうというのは日頃痛感しています。

じゃあ、子どもをどうするかって難しいですけど、今学校の中のいじめ絡みの問題もあるし、闇バイトとか、外とのつながりの中で子どもがリスクに直面するということが多々あって、非常に何か難しいかなと思うんですけど、今私ができるかなというのは2つしか思いつかなくて、1つはお願いベースにしかならないと思うのだけど、親がちゃんと子どものSNSの動きは見るができるように、そのことは条件にして、子どもにスマホを持たせてほしいなと思います。

もう一つは、先ほど校長先生が言われた事例ですよ。これ、さっき年3回と言われましたかね。私は、もっとあってもいいと思いました。どういう機会ですることができるか分かりませんが、事例の中で本当にこういうことがあるのだということを知らせてあげないと、子どもは分からないのかなと。いろいろなニュースがありますが、我が事としてそれを捉えてもらうためには、身近な例として岡山市内の学校であった例でもいいですし、そういうもので情報共有をしていくということぐらいしか、今は思いつきません。

○市長 では、お願いいたします。

○門原教育委員 私もすぐにすぐによい案というのは浮かばないのですが、小学校だったら本当に今、道徳の中にSNSのものがありますので、具体的にそれでしっかり、授業の中で伝えていくことができますし、中学校がされている事例検討会というか、それはすばらしいなと思って聞きました。具体的な事例を見たときに、自分だったらどうするか、ほかの人はどう考えているかと。その考え方を、いろいろ多様な考え方を聞いたり、どうすればよかったかというところまで、直接的に言えなくても、思ったりすることはできるので、小学校の高学年もできると思うんですけど、そういうことは継続してやっていただきたいなと思いました。

私は、SNSによる心の擦れ違いというのを学生と卒論で作ったのですが、犬を飼ったのよとメールの、LINEが来て。かわいくないの後ははてながあるのとなないので、かわいくないって聞いたのに、かわいくない？ってのはてなを付けなかったばかりに、けんかになっちゃったというその事例で授業をしたのですね。きちっとそういう、はてな1つでも読み手は全然感情が違ってくるところも押さえていきましたし、最終的には、このSNSって匿名性が、これが一番ネックだと思います。名のらないので、どういう立場で誰が言っているのか、なりすましが一番怖くて、結局その授業の最後は、直接人と対面でいろいろなことは伝えていこうねという、言葉で伝えていくことの大切さを最後、そういう授業をしたのですけれども、そこがすごく大事で、子ども同士が、コロナもありましたけど、言葉での伝え合い、それから主張の仕方、それから合意形成を図るときの自分が一歩引いたり考えたり、そういうことも並行してやっていくことが大事ではないかなと思います。陰だと何でも言えるけど、表立っては何も言えないという、そうじゃなくて、言いたいことがあればちゃんと主張をして、自分の思いを伝えていくような、理想ですけど、でもそれは大事なことではないかなと思っています。

○市長 はい、お願いいたします。

○片山教育委員 失礼いたします。

今、子どもたちにとってのSNSって本当に身近にあるものというか、あつて当たり前のもの。今、0歳児でも、かなりお母さんのスマホを見たりして過ごしていますし、幼稚園とか保育所でも、子どもたちが最近おままごとをするときに、こうやってやるのです、目の前に。だから、クックパッドの世界なのですね。お料理本ではない。だから、こうやってやって、これを共有する。何かを作るといったら、ポッキーの箱で作るのはスマホというような、あつて当たり前なものの中で、先ほどおっしゃられていた、私も日々の情報モラルの取組というのはありがたいと思うのが、そこであつて当たり前の中で、自分が被害者になって初めて、これは危険なものだということに気付くのかなという。だから、そういう意味で被害者になってもらっては困るので、自動車教習所だの研修ではないですけども、危険だということが身をもって自分事になるような、ある程度そういうものに触れさせていくとか、架空であっても、危険なものだということ伝えていっていただくというのは、すごく大事かなと思います。

それから、よくノーメディアデーというのをつくられるかと思うのですが、ああいうときに子どもたちってものすごく困るのですよね、手持ち無沙汰で。では、外に出て

遊ぼうと言っても、変な話ですけど、ボールが使えないとか、何して遊ぼうという、遊べない。それで、自由時間を過ごせない。結局、寒い、暑いは今極端になってくると、子どもたちはオンラインで、小学生でも結構オンラインゲームでつながっていて、帰ってオンラインゲームしようやと言うと、友達と遊べる。そういうふうになってくると、肌と肌で触れ合いながら、相手の顔色を見ながら駆け引きをしたり、気持ちを思いやってみたり、今日ごめんなみたいな、そういう肌と肌との触れ合いということがすごく少なくなっている。だから、そんな中で、幼稚園、保育所もそうなのですが、学校って直接的に触れ合う場としてすごく重要な場にこれからもっともっとなっていくのかなと。そんなところで、先生たちに気持ちを酌んでもらったり、お互いの気持ちを表現させ合ったりという、まさに肉体同士というか、対面での生活がある。そこでのさっきは褒めるという言葉も出ていたのですが、そこでうれしい思いもするし、残念な思いもするけど、そこからリカバリーをする仕方とか、そんなことが共存する中で、協働的に学んでいけると、学校の間というものの価値というのがもっともっと上がるだろうなということを思います。

○市長 はい、どうぞ。

○中島教育委員 失礼いたします。

この件に関して、被害者、加害者、この2極があって、被害者になる場合も、いじめはまた別だと思っておりますけど、特殊詐欺とか闇バイトとかという部分があって、その部分は徹底した教育、専門家の指導とかの部分とか、事例でこんなに怖いことが起きたということのを再三伝えることというのが必要だと思います。私は、特に高校生とか中学生で思うのは、このSNSの加害者にならないことへの指導が重要なんじゃないかなと。そこには、先ほど先生が言われたように、匿名性があるから、この事例と同じようになりすましになったり、悪口を書くということで、加害者になったりしているのですよね。気軽に加害者になる。じゃあ、その人を例えば殴るとか、刃物でちょっと傷つける、カッとして。同じ加害者なのですよね。その相手に傷を負わせることの、実体験があるか、架空のクラウドであるかの違いであって、同じことをしているという重大性が理解できていないので、まず加害者にならないということを徹底的に伝えることは必要なかなと思っています。

それで、また度々で恐縮なのですが、企業の場合も、例えば従業員とかアルバイトとかが企業の、何か、この会社はこんなだぜとか、SNSに上げるとかというリスクも負っています。ニュースでも、すし屋でしょうゆをどうのこうのしたとか、動画で、あれは動画だからすぐ分かるんですけど、文字ベースのインスタとか、いろいろなことでも、口

コミとか評価で言うと、企業のいろいろな評価はあって、そのことは弊社の場合は就業規則にもルールを入れてありますし、徹底的に調べます。それを社員さんには、こういうことがあった場合は徹底的に罰則を設けますみたいなことを通知しているので、そこはリスクマネジメントにしなければいけないから、加害者になったとき、どういったことが自分の身に起きて、どういったことになるかというのは分かってもらえることが、あまりにも気軽過ぎるので、重要なんじゃないかなというのは私が常に感じているところです。

○市長 ありがとうございます。

委員さん4人のご意見をいただきましたけれども、教育委員会、ないしは総務局も子育てを経験した、局長なんかは経験しているわけで、何かご意見があれば教えてください。

○市長 教育長、どうぞ。

○教育長 2つ今思ったのですが、中島委員が言われたのは、これをしたらどういうことが起きるかという想像力のところで、不祥事のときなんかの対応も私は結構したのですが、これをしたらどうなるかという想像力のところは必要だと思うのが1点と、それからそこに教育長メッセージ発出というがあるので、私はそこが今気になっていて、意見を聞いて、稚拙ではあるかもしれませんが、片山委員が言われた、ノーメディアのときに何していいかわからない。何もネタがないというか。その中で、ばば抜きとか人生ゲームとか、確かに相手の顔を見ながら駆け引きをしたり、負けて悔しいけど我慢をしたり、勝ったり、何かリアルな、バーチャルじゃないリアルのある良さがあるのかなというのを今思っていて、実は1週間前ぐらいに京山公民館のSDGsの発表があって、京山中でしたかね、お子さんが医者不足について調べていて、岡山県内の周辺部に医者がないというのは、そんなことはないという仮説を立てられた生徒がおられて、その子がよかったのは、田舎に正月に帰ったときに、田舎のおじいちゃんにインタビューしました。そしたら、お医者さんがいないと言うてました。やっぱり本当でしたみたいな、本当にいい発表でした。素晴らしい子だと思ったけど、そういうリアルな対応とか取組、関わり。バーチャルもやめることはないし、悪いこともないので、両面のよさをやっていくべきかなというのを改めて、今意見を聞いていて思いました。

○総務局長

若干感想になるかもしれないのですが、今のSNSのお話、新聞にそういった話題が出ない日がないぐらい、それが当たり前の世界に私たちは生きているのだと思うのですが、前の集団づくりのお話と関連があって、そういった世界に今まさに生きている子ど

もたちに、我々の思う価値観でもって、こういうのがいいクラスなのだ、いいお友達なのだ、いい学校生活なのだというのを言って、本当にそれが直接伝わるのかなというのが、お話を聞かせていただいて感じました。それで、若い先生が多く、これから団塊の世代の先生方が抜かれてという状態にあると思いますので、その若い先生をしっかりサポートする、そういった態勢も非常に重要なんじゃないかなと感じました。

○市長 ほかに教育委員会、総務局、どなたでもいいですが、意見をおっしゃりたい方がいますか。

○上西教育委員 適切かどうかは分かりませんが、僕はこのSNSとかの話を教育の場では相当難しいとっていて、というのは小学校、中学校で、恐らくですけど、信頼ベースで社会を教えていくのだと思います。信頼の中で社会が成り立っているということをちょっとずつ教えていって、社会の中で生きていける人間をつかっていくのだと思うのですが、SNSは不信ベースですよ。だから、知らない番号には出るとか、片方で信頼ベースを育てながら、片方でまず不信感から入れということを教えなければいけないというのは、相当先生は苦しいのではないかと。子どもも混乱しまうのではないかなと危険を感じますね。そこらあたりをどう消化していったらいいか、この被害者、加害者にならないような教育をしていくのって、結構工夫が要るかなと。あまり不信ベースの話をしてしまうのも、正直子どもにはきついかもしれないなと感じました。

○市長 ほかに何かございますか。

私は、上西さんが最初に言った言葉で、複数人格があると。それは、多分全ての人が持っているものだと思うんですね。だから、佐藤さん、半澤さん、学校でいろいろな教育をやられている。それで、それぞれの子どもたちもそれなりに理解はする。でも、理解をしたとおりに動くかというところは、なかなか難しいと思いますよね。それで、時々私もいじめの案件を教育委員会の担当から聞いて、やっぱりSNSが絡んでいるものの中にはある。それで、それはゼロにはならないかもしれないのだけど、昔はなかった案件ですね。だから、一足飛びに、オーストラリアみたいに、15歳以下は持たせないというのがいいかどうかという議論ももちろんある。だから、我々は社会実験とよく言うのですが、こういうことをやったら、どの程度まで問題が減っていくとか、取りあえず校長会とか、校長会の前には校長と各先生との議論、こんなことをやってみて、案を出してみようとか、それに教育委員会も加わっていただいて、先ほど言われたような延長しかないのかもしれないけど、何かトライアンドエラー、あまりエラーをしても、子どもたちはかわいそ

う。学校教育自身はリフレッシュしていくというのがあるかも知れないけど、子どもたちはそのまま卒業してしまいますよね。だから、そうはいったって、あまりにドラスチックなことをやると、逆にうまくいかないかもしれない。多分、そんな面では、いい解はない。だけど、何かやってみるということは重要ではないかと、今日、教育長がSNSを議題として取り上げていただいたというのは、少なくとも何かこのSNSに対して、今までとは違う対応をしないと、学校ないしは生徒が困ってしまうことになる。そういうことの中で、多分そう簡単に解は見つけれないけど、地道な議論をやって、岡山市としての方針はこれで行くのだと。例えば、来年度のしかるべきときからでも動いていくとか、そんなことをやってみる。だから、今解は持っていないのだけど、今さっきおっしゃったようなことを頭の中に置きながら、具体案をつくっていく。どうでしょうかね。

○教育長 市長がおっしゃられたとおりで、資料2に書かせていただいていますけど、今日きっかけとか、私も何らかのものを、答えではなくて、議論してほしいというメッセージは出したいと思っています。リーフレットも担当と一緒に考えると言ってくれているので、その右側にあるリーフレットを活用した周知、啓発、協議、市長が言われたとおりですけど、そういうきっかけを基に、各種団体、その中にもしゃべりんびつくという生徒会の集いというのがありますので、子どもたち自身も、中学生だったら、何か考えてくれると思っています。あとは学校の中での話し合いとか、みんなが自分事で考えていくということが大事だと思いますので、市長がおっしゃったように、これから取り組んでみようと思います。

○市長 そうですね。ありがとうございます。

佐藤さん、半澤さん、何かありませんか。

○佐藤中学校長会長 今、教育長がおっしゃった、生徒会の集いというのは、私はいいかなと思っていて、子どもたちから発信というのは、実は子どもたちに非常に影響があって、今勤務している学校ではないのですけれども、かつて自分が勤務していた学校で、生徒会が携帯電話の使い方について寸劇をして、生徒に見せたのです。やっぱり生徒から発信して生徒に伝えることって非常に効果があるなと思ったので、ぜひこの生徒会の集いの中から発信していただけると、広がっていくのかなと感じました。

○半澤小学校長会長 具体的にいい事例が浮かばないのですけれども、一つの子どもたちに投げかけていくテーマとして、今は被害と加害という話が出ていたんですけども、このSNSというのは自由にものが言える、そういう権利がどんどんなくなっていく世の中に

なってしまうような気がするのです。なので、子どもたちが自分で自由な意見を言える、自分たちの自由を守ろうじゃないのというようなテーマで子どもたちに考えてもらうというのもありなのかなと思いました。

○市長 何か追加してお話しされることはあるでしょうか。よろしいですか。これはなかなか尽きないテーマではありますけれども、でも避けて通れないテーマであります。見なければいいといっても、グループLINEに入っていれば、見ないわけにはいかないですよ。グループLINEから抜けなければいいって、抜けたら孤立が強まっていく、相当のジレンマをもっているものなので、一朝一夕に何かが変わるわけではないかもしれないけど、各学校側が真剣にやっているということが見えるだけでも、子どもたちには大きなプラスになるのではないかなと思っております。

教育委員会のほうは、最後追加することはありますか。いいですか。

○島田教育次長 前半の話と一緒に、学校と一緒にやって取り組むことが、きっとプラスに転じていく大きな原動力となると思っておりますので、しっかりご意見をいただきながら進めてまいります。

○市長 学校と一緒にというか、学校側が中心になるのではないかと、この問題はですね。先生と生徒と一緒にやらないと、解決しないし、なっても解決は多分そう簡単にする話ではない。だけど、一歩でも二歩でも前に行けるように、取りあえず動いてみる。ということでやりましょう。

そういうことで、これから教育委員会が中心としてやっていただくということになります。今後ともよろしく願いをいたします。

今日の議題以外で何か、この会の運営とかについてご指摘があれば、よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

○市長 それでは、ありがとうございました。

進行を司会に戻します。

○司会 ありがとうございました。

次回の会議は、改めて通知させていただきます。

以上で令和6年度第3回総合教育会議を閉会します。本日はお疲れさまでした。

午後4時47分 閉会